

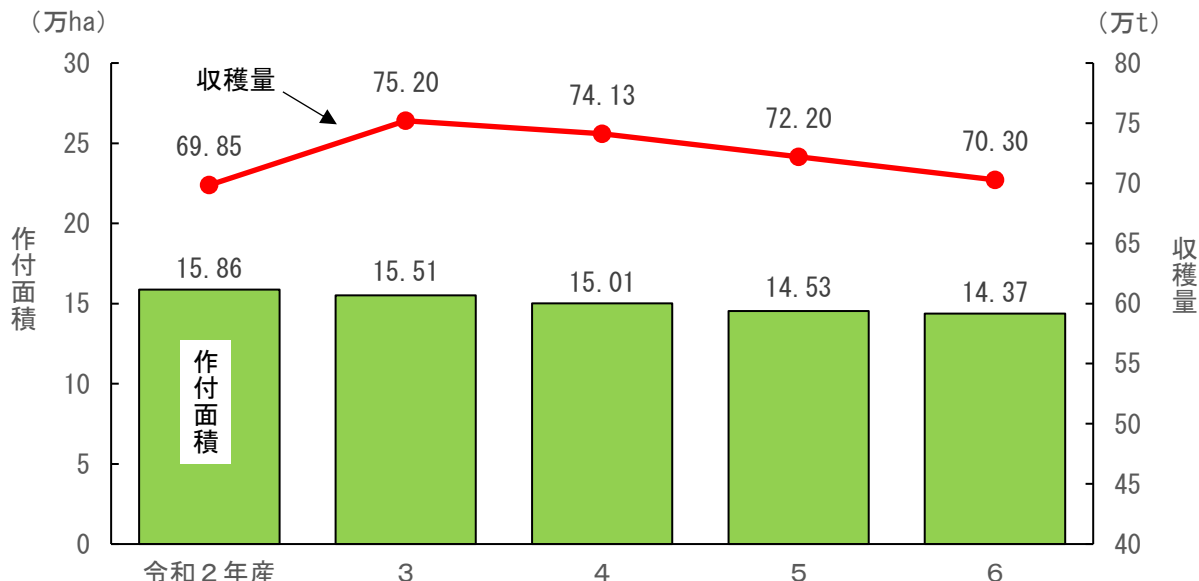
【水稻の収穫量(子実用*)は70万3,000 t (前年産に比べ1万9,000 t 減少)】

令和6(2024)年産における九州の水稻作付面積(子実用)は、14万3,700haで前年産に比べ1,600ha減少しました。そのため、収穫量(子実用)は、前年産から1万9,000 t 減少し70万3,000 t となりました。作柄は、全もみ数が平年を上回ったものの、田植期以降の日照不足や高温及び台風第10号の影響により、「平年並み」(作況指数99)となりました。

令和6年産米の食味ランキング((一財)日本穀物検定協会)では、九州で4銘柄が最高評価の「特A」を獲得しています。

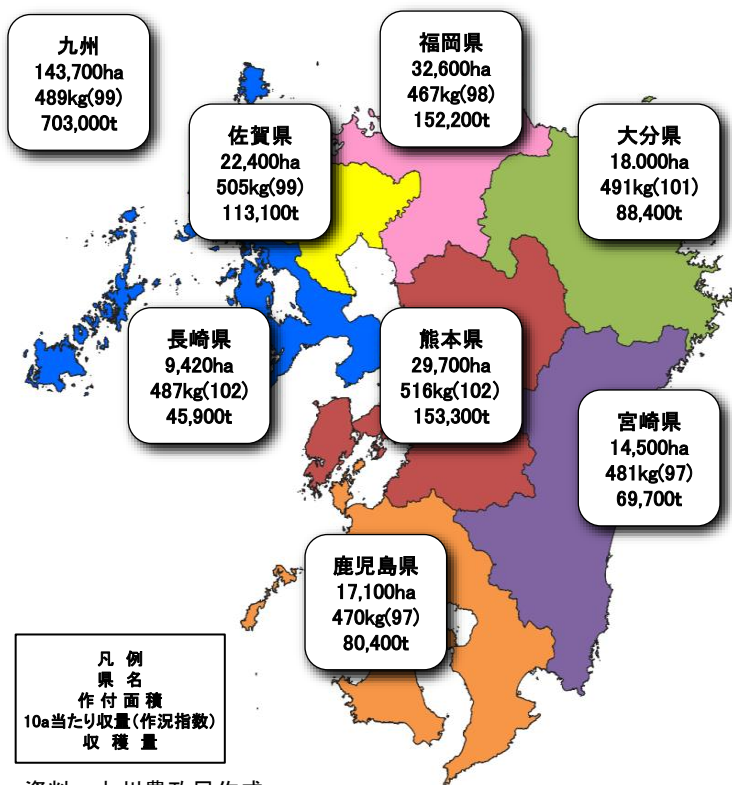
* 主に食用に供すること(子実生産)を目的とするものをいう。

水稻作付面積及び収穫量の推移(九州)

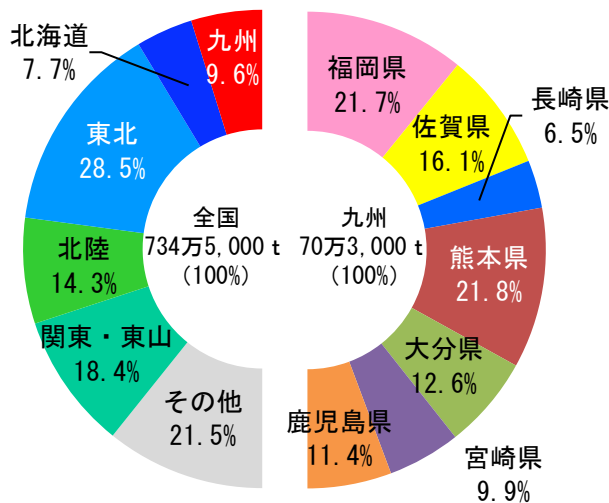


資料：農林水産省「作物統計」

県別作付面積及び収穫量



凡例
県名
作付面積
10a当たり収量(作況指数)
収穫量

令和6(2024)年産
収穫量の割合(全国・九州)

資料：農林水産省「作物統計」

注：割合については、表示単位未満を四捨五入しているため、合計値と内訳の計が一致していない場合がある。

令和6(2024)年産食味試験結果
(九州特A一覧)

産地	品種名	地区
佐賀県	さがびより	
	夢しずく	
大分県	ひとめぼれ	西部
鹿児島県	あきほなみ	県北

資料：(一財)日本穀物検定協会

資料：九州農政局作成

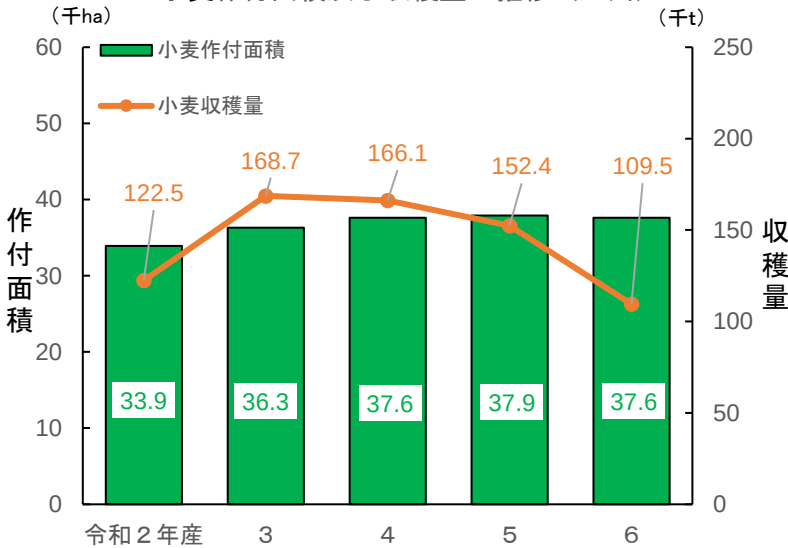
生産 — 小麦・大豆 —

【小麦の収穫量は、前年産に比べ4万2,900 t 減少】

令和6(2024)年産の小麦(子実用^{*})の作付面積は3万7,600haで前年産に比べ300ha減少、収穫量は10万9,500 tで、前年産に比べ4万2,900 t減少しました。九州の全国に占める割合は10.6%となっており、福岡、佐賀、熊本で約9割を生産しています。

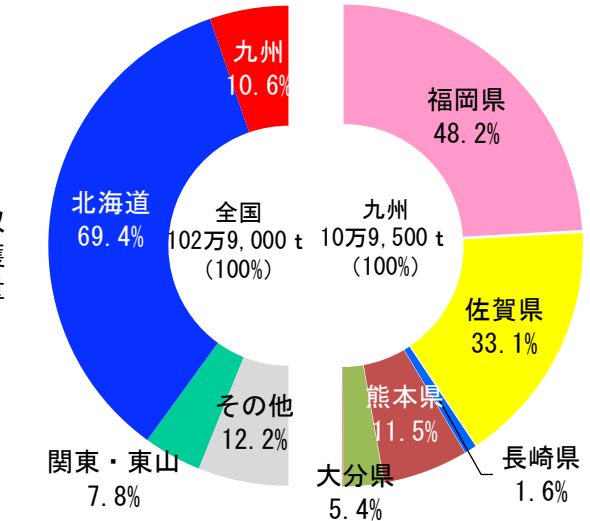
^{*} 主に食用にすること(子実生産)を目的とするものをいう。

小麦作付面積及び収穫量の推移(九州)



資料：農林水産省「作物統計」

令和6(2024)年産
小麦収穫量の割合(全国・九州)



資料：農林水産省「作物統計」

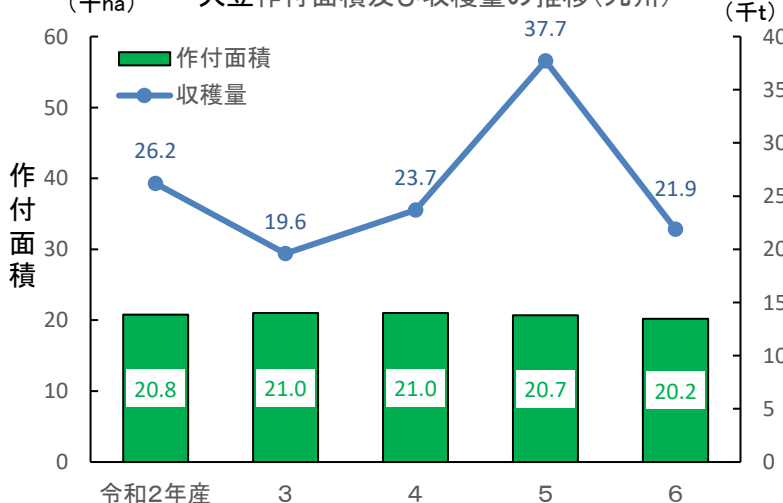
注：割合については、表示単位未満を四捨五入しているため、合計値と内訳の計が一致していない場合がある。

【大豆の収穫量は、前年産に比べ1万5,800 t 減少】

令和6(2024)年産大豆(乾燥子実^{*})の作付面積は2万200haで前年産に比べ500ha減少、収穫量は2万1,900 tで、は種期以降の高温や少雨(過乾燥)による発芽不良や生育不良に加え、台風第10号の影響や虫害の発生も多く前年産に比べ1万5,800 t減少しました。九州の収穫量の全国に占める割合は約9%となっており、福岡、佐賀で約8割を生産しています。

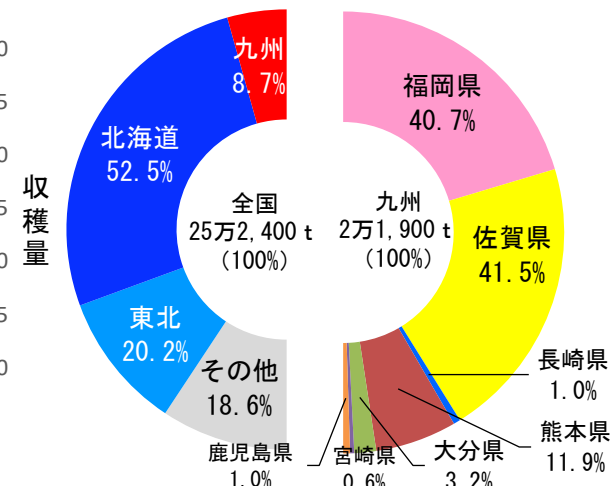
^{*} 食用を目的に未成熟(完熟期以前)で収穫されるもの(えだまめ)を除いたものをいう。

大豆作付面積及び収穫量の推移(九州)



資料：農林水産省「作物統計」

令和6(2024)年産
大豆収穫量の割合(全国・九州)



資料：農林水産省「作物統計」

注：割合については、表示単位未満を四捨五入しているため、合計値と内訳の計が一致していない場合がある。

【九州は重要な野菜供給基地】

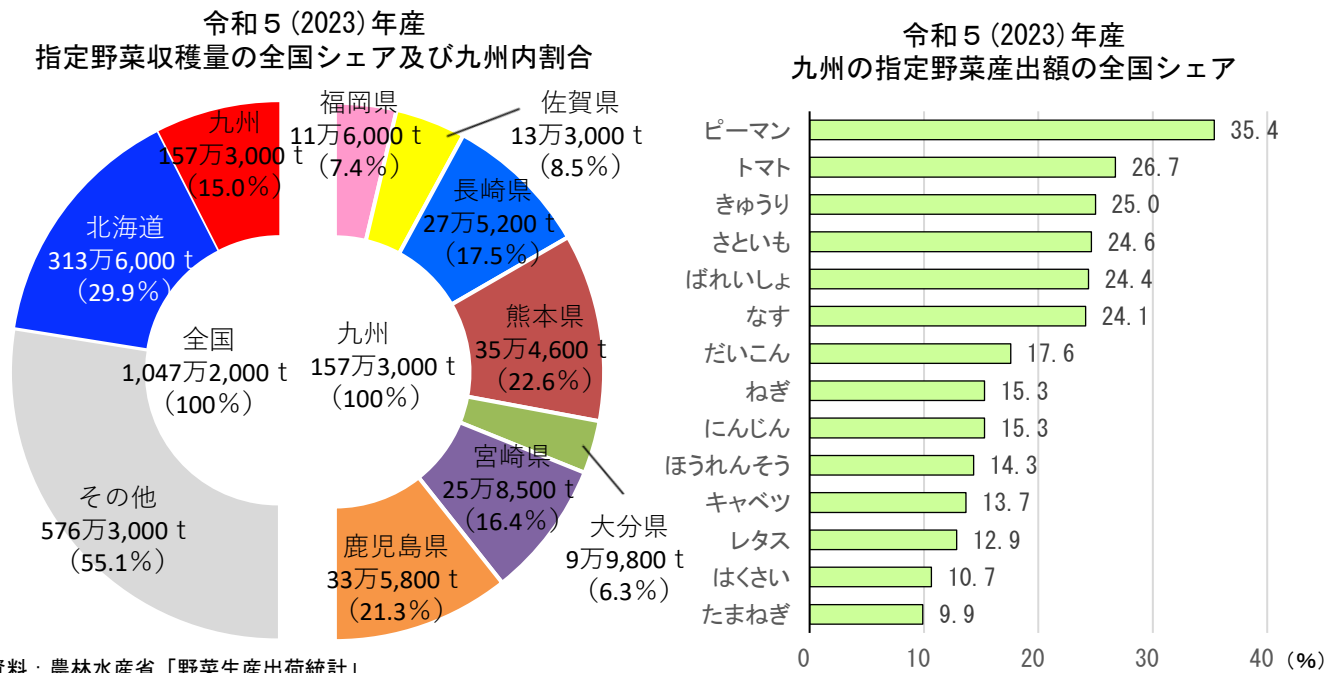
九州では、温暖な気候を生かした野菜の栽培が盛んです。令和5（2023）年産の九州の指定野菜（14品目*1）は、ピーマン及びトマト等の施設野菜や、さといも及びだいこん等の露地野菜を中心に、収穫量では全国の15.0%、産出額では全国の19.8%を占めています。また、野菜全体の産出額（ばれいしょは除く*2）でも、全国の19.7%を占めていることから、九州は重要な野菜供給基地であるといえます。

全国に占める産出額の割合が高い指定野菜を品目別にみると、ピーマン（全国シェア35.4%。宮崎県全国2位、鹿児島県同4位）、トマト（同26.7%。熊本県同1位）、きゅうり（同25.0%。宮崎県同1位）、さといも（同24.6%。宮崎県同2位、鹿児島県同5位、熊本県同9位）の順となっています。

指定野菜以外では、いちご（同34.3%。福岡県同2位、熊本県同3位、長崎県同4位、佐賀県同8位）、すいか（同23.5%。熊本県同1位）、メロン（同22.6%。熊本県同2位）等が、全国に占める産出額の割合が高い品目として挙げられます。

*1 指定野菜とは、野菜のうち特に消費量の多いもの（下右のグラフの14品目）

*2 農業産出額では、ばれいしょは「いも類」に分類される。



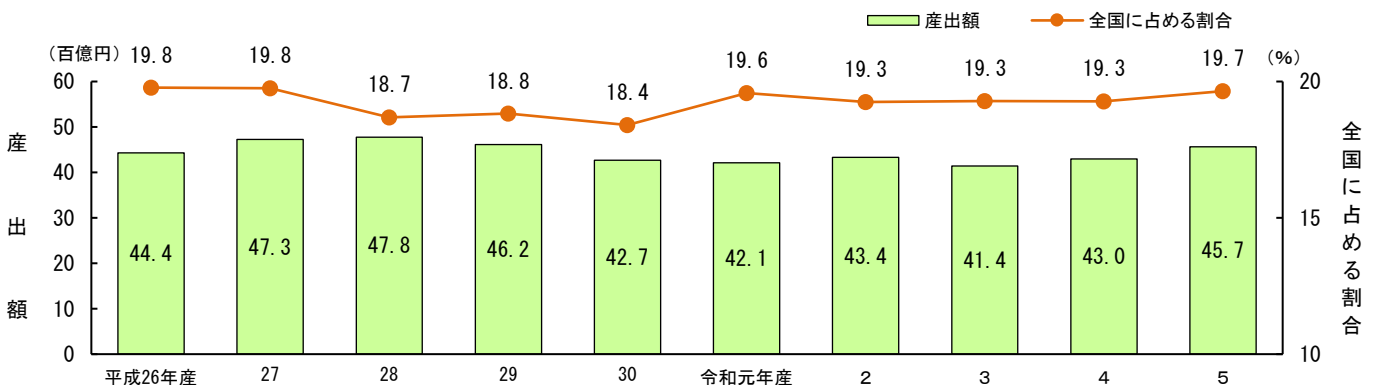
資料：農林水産省「野菜生産出荷統計」

注：1 野菜生産出荷統計結果を基に九州農政局において指定野菜を集計した値

2 数値及び割合については表示単位未満を四捨五入しているため、合計値と内訳の計が一致しない場合があります。

資料：農林水産省「生産農業所得統計」

野菜の産出額の推移（九州）（10カ年）



資料：農林水産省「生産農業所得統計」

【栽培面積は減少傾向にあるものの産出額は微増】

九州における果樹の栽培面積（主産県^{*1}）は、生産者の高齢化や担い手不足による廃園等により、令和5（2023）年産は2万5,500haで前年産に比べ500ha減少となっています。

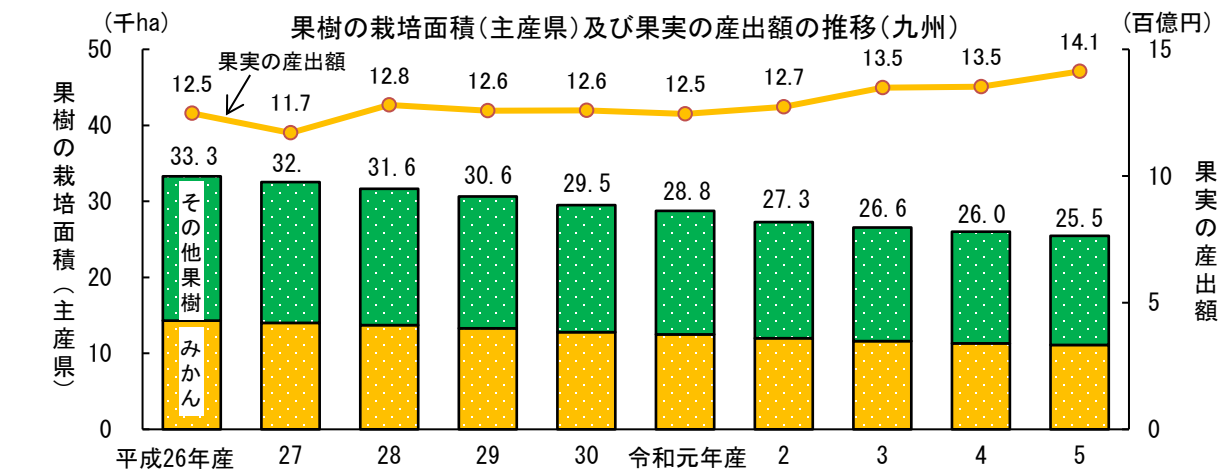
一方で、果実の産出額は1,413億円と前年産に比べ600億円（4.4%）増加しており、これは、生産量の減少によって市場の品薄感が高まり、価格が上昇したこと等が寄与したものと考えられます。

九州が全国の収穫量の約3割を占めるみかんでは、結果樹面積^{*2}が1万600haで前年産に比べ300ha（2.8%）減少したものの、着果数が多かったこと等から、収穫量は21万700tで、前年産に比べ1万2,300t（6.2%）増加しています。また、九州の収穫量のうち、熊本県、長崎県、佐賀県で約8割を占めています。

主な果実の産出額は、みかん562億円（全国シェア32.4%、熊本県全国4位、佐賀県同5位、長崎県同6位、福岡県同8位）、ぶどう193億円（同9.3%、福岡県同5位、大分県同10位）、しらぬい（デコポン）118億円（同68.6%、熊本県同1位）、日本なし104億円（同14.5%、大分県同7位、熊本県同8位、福岡県同9位）となっています。

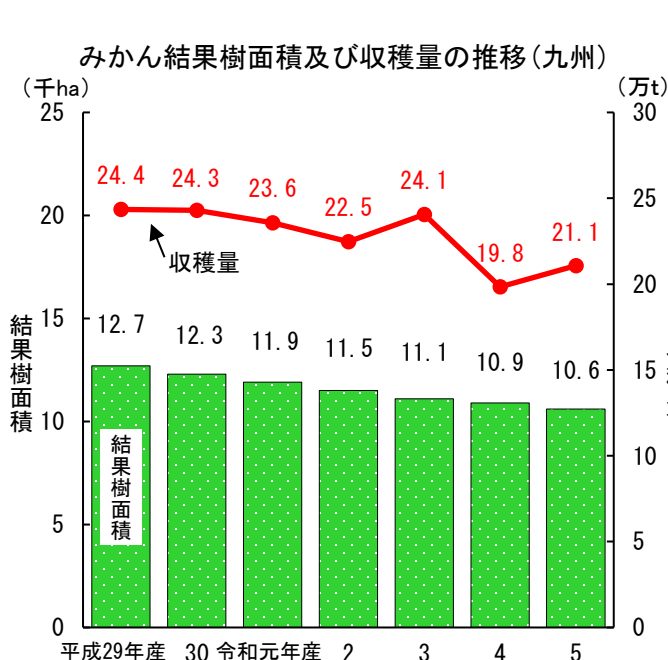
^{*1} 主産県とは、全国の栽培面積のおおむね80%を占めるまでの上位都道府県又は果樹共済事業を実施する都道府県

^{*2} 結果樹面積とは、果樹栽培において、その年に収穫を目的として実をならせるために結果させた樹木の面積

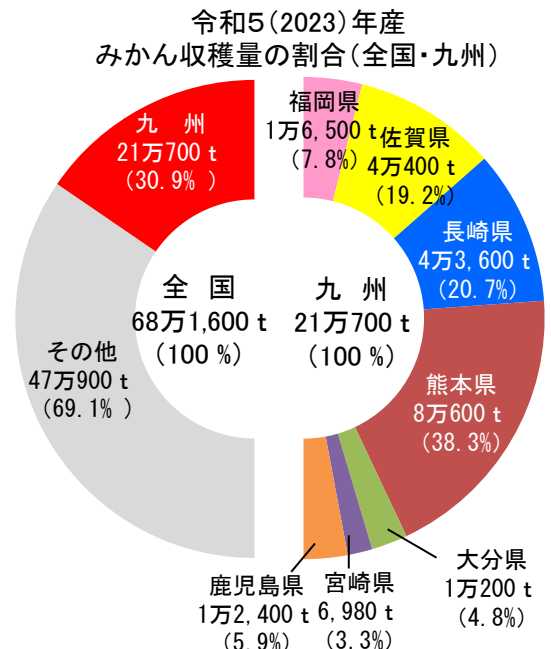


資料：農林水産省「生産農業所得統計」「耕地及び作付面積統計」

注：その他果樹は、その他のかんきつ類、くり、かき、日本なし、ぶどう、うめ、びわ、キウイフルーツ、すもも



資料：農林水産省「果樹生産出荷統計」



資料：農林水産省「果樹生産出荷統計」

注：数値及び割合については表示単位未満を四捨五入しているため、合計値と内訳の計が一致しない場合があります。

生産 — 花き —

【産出額は回復傾向、栽培面積は漸減傾向】

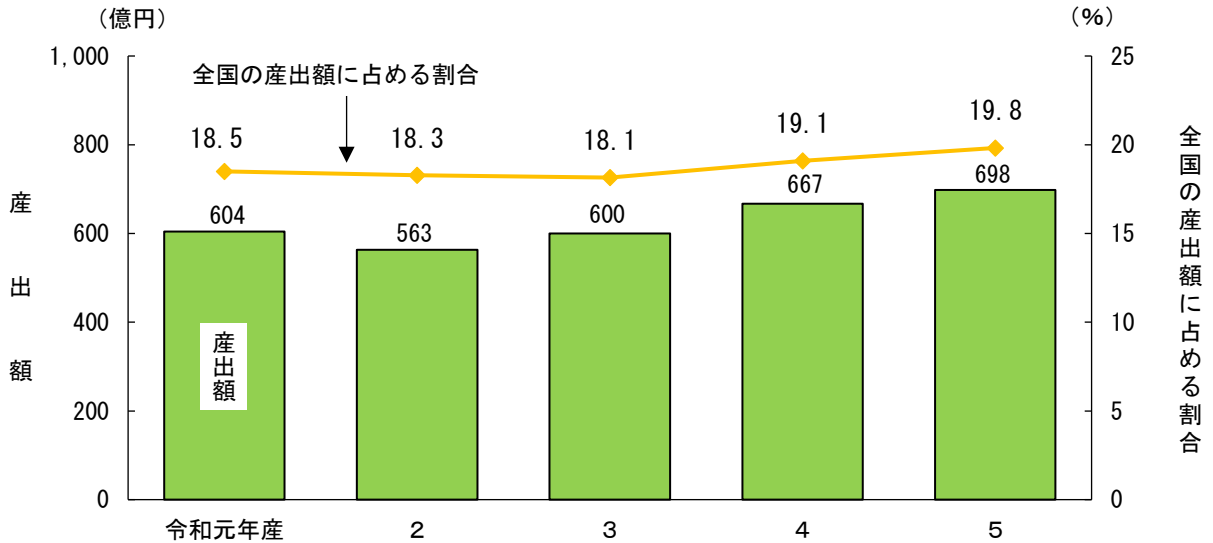
九州における令和5（2023）年産の花きの産出額は、全国の19.8%を占める698億円となっています。前年産に比べ31億円増加しており、これは、継続するイベント需要の高まりや、生産量の減少によって市場の品薄感が高まり、価格が上昇したこと等が寄与したものと考えられます。

一方、令和5（2023）年産切り花の作付面積は2,260haで、前年に比べ30ha（1.3%）減少しています。これは生産者の高齢化による作付面積の減少が続いていることを背景に、近年漸減傾向で推移しているためです。

出荷量は6億1,210万本で、前年産に比べ650万本（1.1%）減少しているものの、全国シェアは20.2%を占めています。

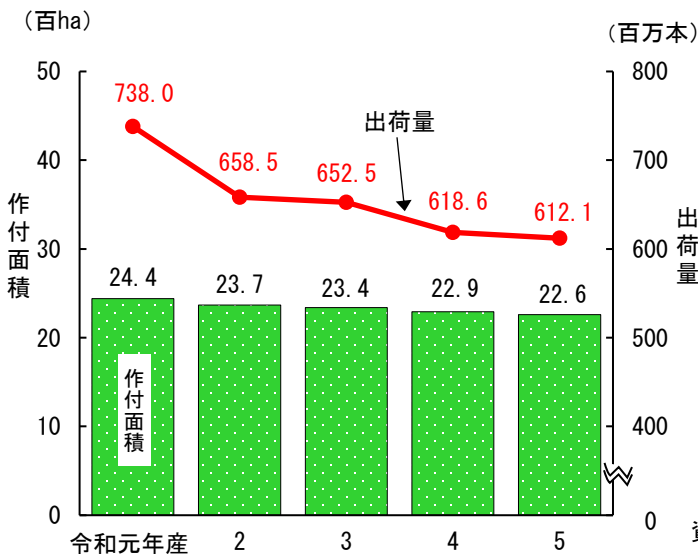
県別の出荷量をみると、きくやガーベラ等の生産が盛んな福岡県、きくや切り葉等の生産が盛んな鹿児島県の両県で九州の43.5%を占めています。

九州における花きの産出額及び全国に占める割合の推移

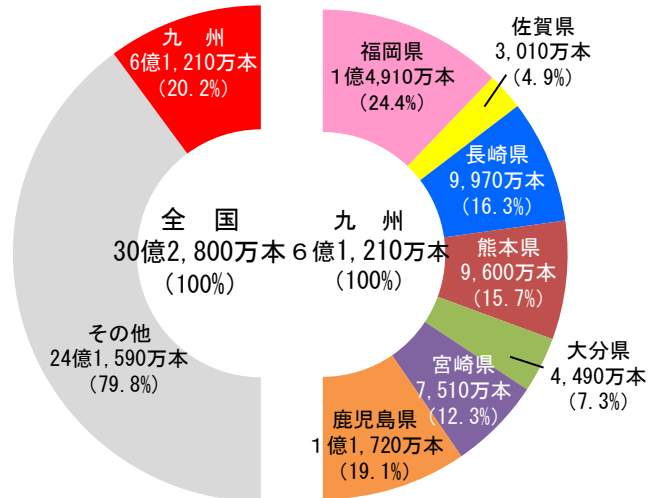


資料：農林水産省「生産農業所得統計」

花き（切り花類）作付面積及び出荷量の推移（九州）



令和5（2023）年産
花き（切り花類）出荷量の割合（全国・九州）



資料：農林水産省「花き生産出荷統計」

注：数値及び割合については表示単位未満を四捨五入しているため、合計値と内訳の計が一致しない場合があります。

資料：農林水産省「花き生産出荷統計」

生産 — 地域特産作物 —

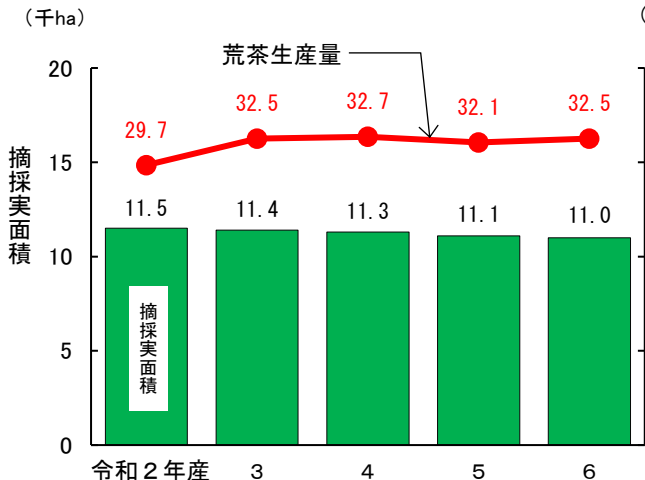
【茶：九州（主産県）の荒茶生産量は、全国（主産県）の約5割を占める】

九州（主産県）^{*}の令和6（2024）年産茶の摘採面積は1万1,000haで前年産に比べ100ha（1.1%）減少しており、荒茶生産量は3万2,500tで前年産に比べ400t（1.2%）増加しています。

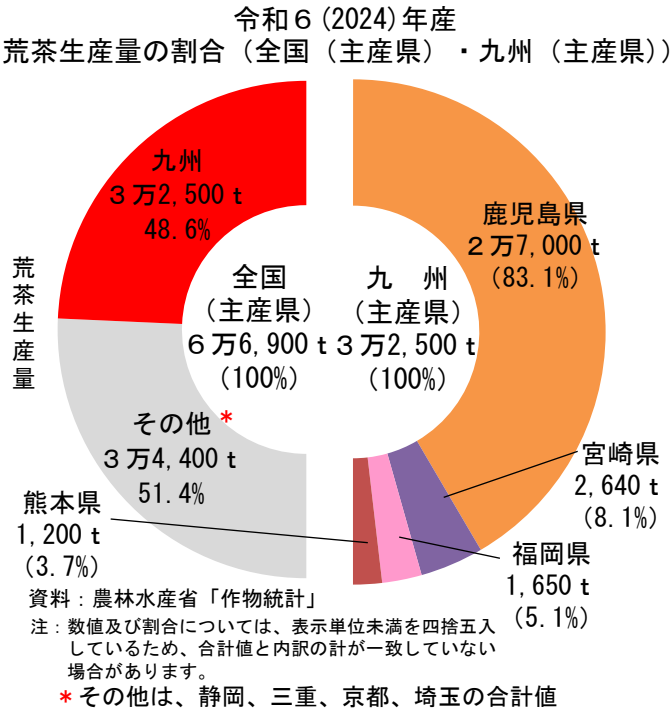
九州（主産県）の荒茶生産量は全国（主産県）の48.6%を占めており、その中でも鹿児島県は、九州全体の8割以上を占めるなど、全国第1位の産地が形成されています。その他、宮崎県、福岡県でも、煎茶やかぶせ茶等の生産、加工が盛んです。

^{*} 九州(主産県)は、福岡、熊本、宮崎、鹿児島の合計値

茶摘採実面積及び荒茶生産量の推移（九州（主産県）） 荒茶生産量の割合（全国（主産県）・九州（主産県））



資料：農林水産省「作物統計」
注：令和6年産は概数値である。

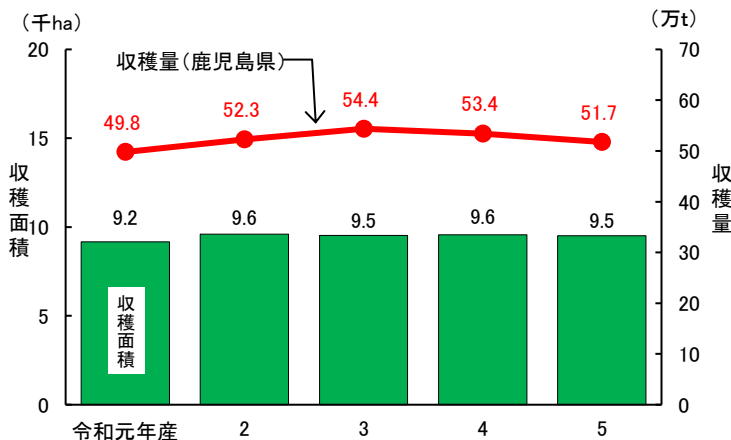


【さとうきび：鹿児島県南西諸島の基幹的作物】

さとうきびは、鹿児島県南西諸島及び沖縄県の基幹作物として栽培されています。近年、鹿児島県のさとうきび収穫面積は横ばい傾向で推移しており、令和5（2023）年産の収穫面積は9,510haとなっています。

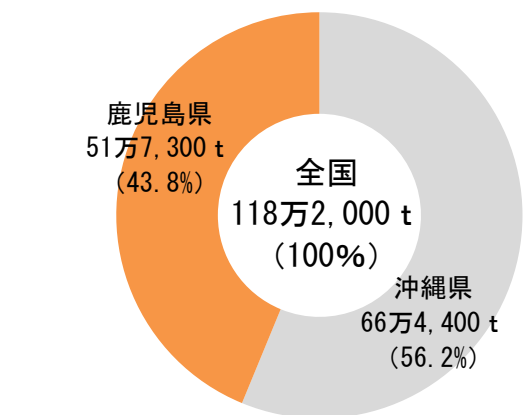
一方、収穫量は年間を通して少雨だったことにより生育が抑制されたことから、前年産に比べてやや減少し、51万7,300tとなっています。

さとうきび収穫面積及び収穫量の推移（鹿児島県）



資料：農林水産省「作物統計」

収穫量の全国シェア（令和5（2023）年産）



資料：農林水産省「作物統計」

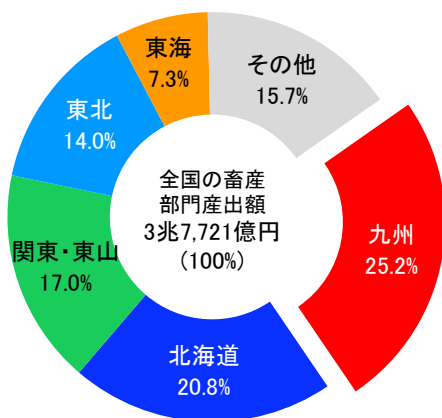
注：数値及び割合については、表示単位未満を四捨五入しているため、合計値と内訳の計が一致していない場合があります。

【日本最大の畜産地帯】

九州における畜産部門の農業産出額は、全国の約25%を占めており、畜種別では、高い順に鶏（鶏卵及びブロイラー）、肉用牛、豚、乳用牛となっています。

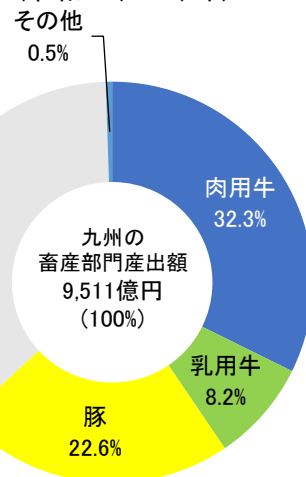
また、九州における肉用牛、豚及びブロイラーの畜種別農業産出額の全国シェアは、それぞれ約4割、約3割、約5割を占め、農業地域別で全国1位の生産地域であり、我が国最大の食肉供給基地となっています。

農業産出額の畜産部門の全国割合
(令和5(2023)年)



九州の畜産部門産出額の畜種別割合
(令和5(2023)年)

畜種別



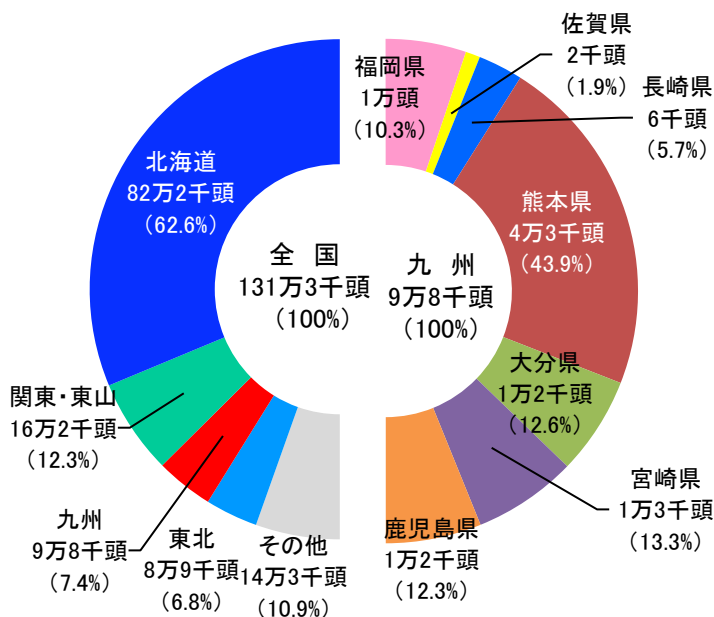
資料：農林水産省「生産農業所得統計」

注：数値及び割合については表示単位未満を四捨五入しているため、合計値と内訳の計が一致しない場合があります。

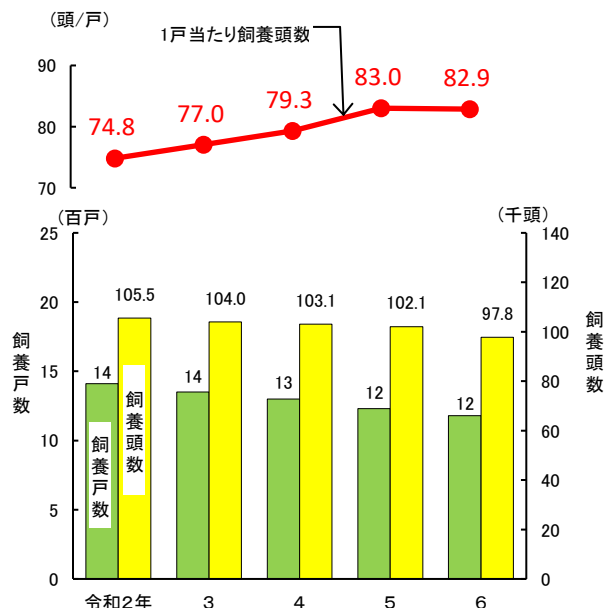
【乳用牛】

乳用牛の飼養頭数は近年減少傾向で推移しており、令和6(2024)年は前年に比べ、4,300頭減少し9万7,800頭となりました。県別の飼養頭数では熊本県が全国3位となっています。

飼養頭数の割合（全国・九州）
(令和6(2024)年2月1日現在)



飼養戸数、飼養頭数の推移(九州)



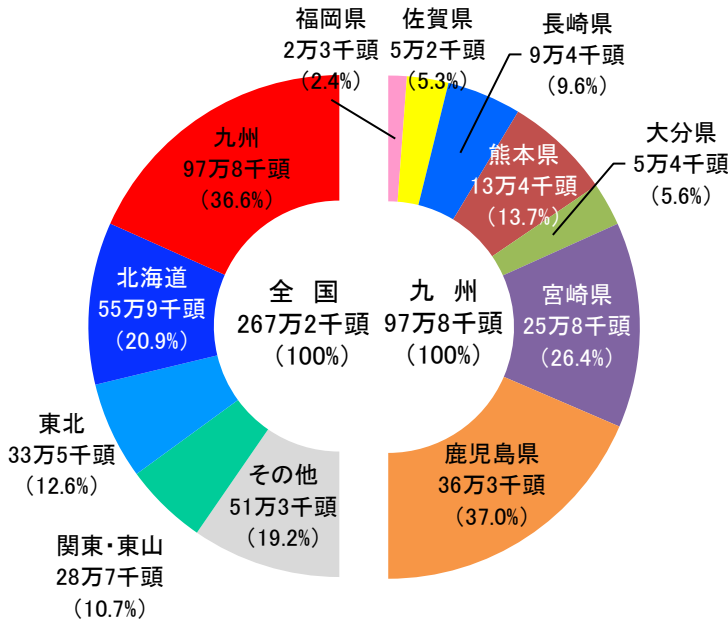
注：数値及び割合については表示単位未満を四捨五入しているため、合計値と内訳の計が一致しない場合があります。

資料：農林水産省「畜産統計」

【肉用牛】

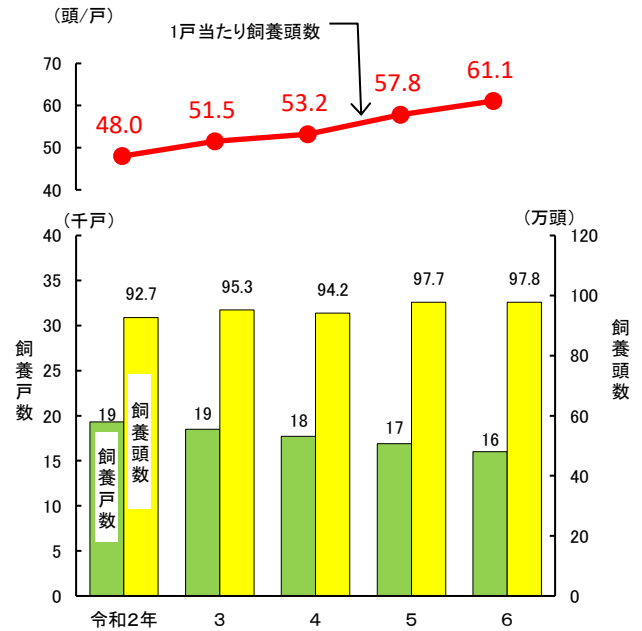
肉用牛の飼養頭数は、各般の生産基盤強化対策の実施により、増加傾向で推移しており、令和6（2024）年については前年に比べ800頭増加し97万8,200頭となりました。九州は全国の飼養頭数の3分の1強を占めており、県別の飼養頭数では鹿児島県が全国2位、宮崎県が同3位、熊本県が同4位、長崎県が同5位となっています。

飼養頭数の割合（全国・九州）
（令和6（2024）年2月1日現在）



注：数値及び割合については表示単位未満を四捨五入しているため、合計値と内訳の計が一致しない場合があります。

飼養戸数、飼養頭数の推移（九州）

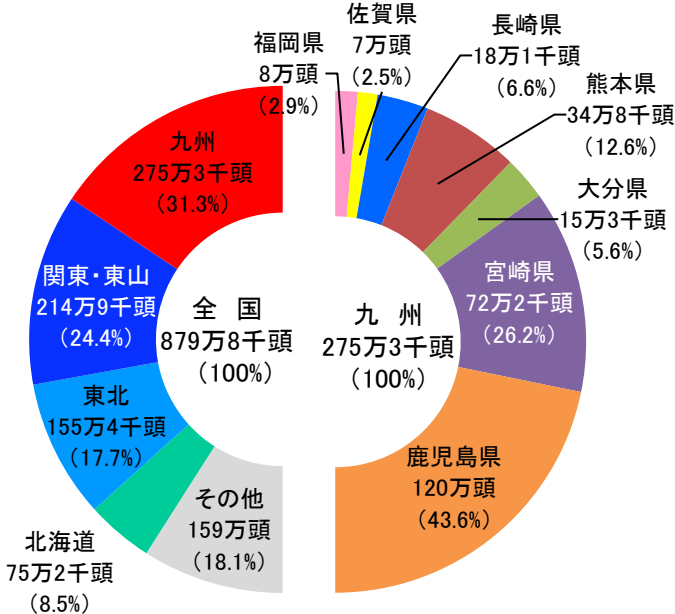


資料：農林水産省「畜産統計」

【豚】

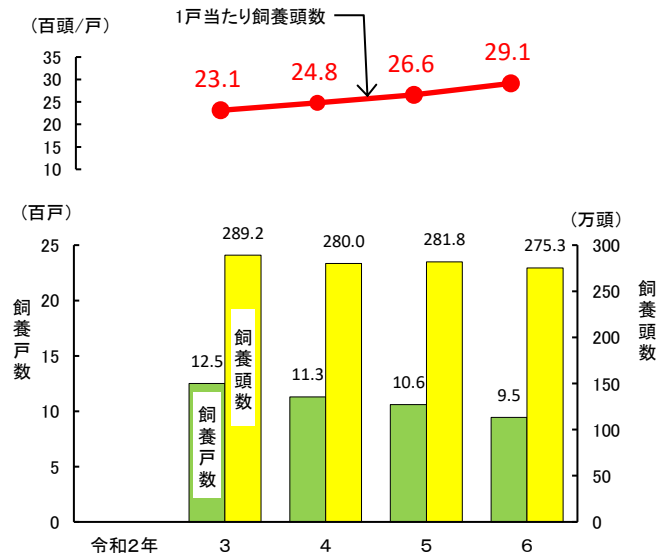
飼養頭数は減少傾向で推移しています。令和6（2024）年は前年に比べ6万5,000頭減少し275万3,000頭となりました。県別の飼養頭数では鹿児島県が全国1位、宮崎県が同3位となっています。

飼養頭数の割合（全国・九州）
（令和6年（2024）年2月1日現在）



注：数値及び割合については表示単位未満を四捨五入しているため、合計値と内訳の計が一致しない場合があります。

飼養戸数、飼養頭数の推移（九州）



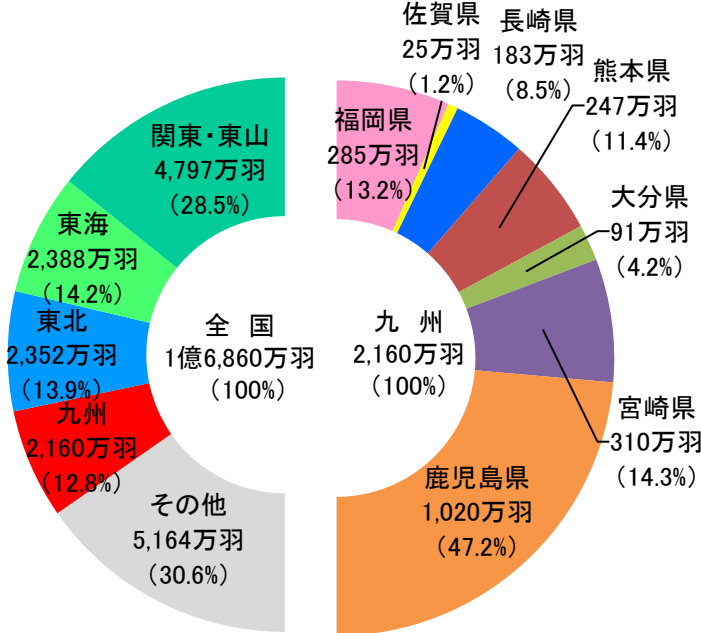
資料：農林水産省「畜産統計」

注：令和2（2020）年は、農林業センサス実施年のため「豚」の調査休止。

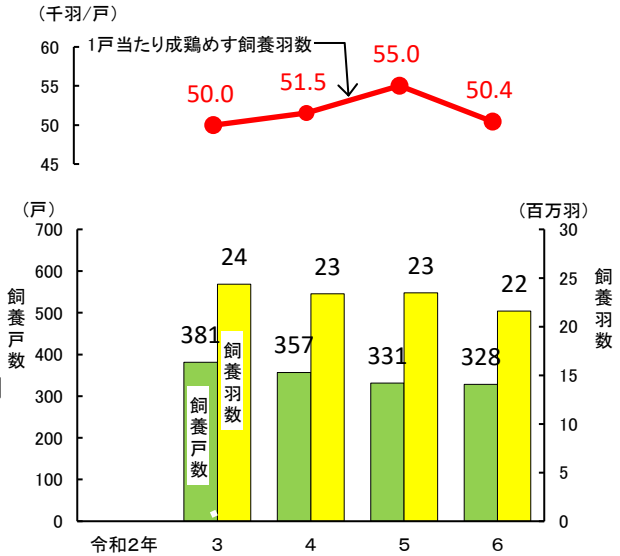
【採卵鶏】

近年の飼養羽数は、減少傾向で推移しており、令和6(2024)年は前年に比べ185万8,000羽減少し2,160万1,000羽となりました。県別の飼養羽数では鹿児島県が全国3位となっています。

飼養羽数の割合（全国・九州）
（令和6年(2024)年2月1日現在）



飼養戸数、飼養羽数の推移(九州)



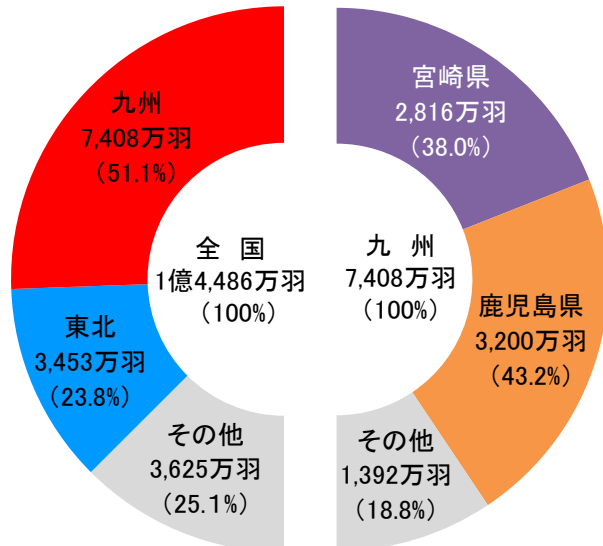
注：数値及び割合については表示単位未満を四捨五入しているため、合計値と内訳の計が一致しない場合があります。

資料：農林水産省「畜産統計」
注：令和2(2020)年は、農林業センサス実施年のため「採卵鶏」の調査休止。

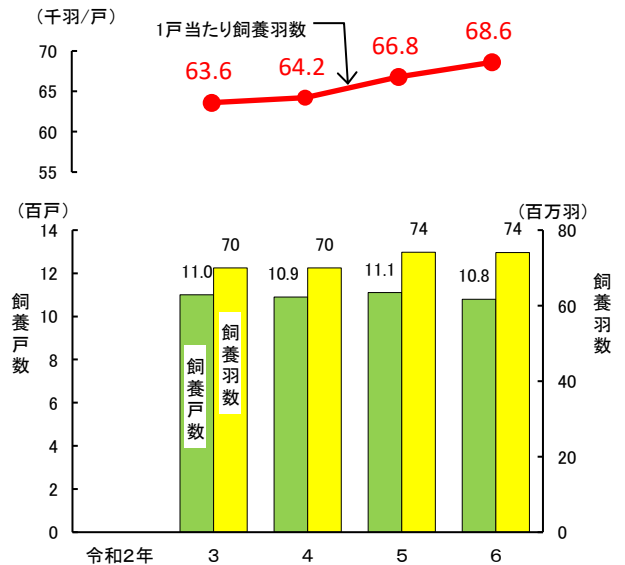
【ブロイラー】

近年の飼養羽数は、ほぼ横ばいで推移しており、令和6(2024)年は前年に比べ3万3,000羽減少し7,408万羽となりました。県別の飼養羽数では、鹿児島県が全国1位、宮崎県が同2位となっています。

飼養羽数の割合（全国・九州）
（令和6年(2024)年2月1日現在）



飼養戸数、飼養羽数の推移(九州)



注：数値及び割合については表示単位未満を四捨五入しているため、合計値と内訳の計が一致しない場合があります。

資料：農林水産省「畜産統計」
注：令和2(2020)年は、農林業センサス実施年のため「ブロイラー」の調査休止。